

— はじめに — 「花となるより根となろう！！」

平成十六年十二月三十日に釧路の実家にて携帯で受けた電話は、私の人生の大きな転機となりました。電話の主は柴崎正勝先生でした。「静岡がお前に興味がある、薬学だけ出するか？」との問いかけに、「もちろん応募します、例のプロジェクト以来、薬学で独立したいと思っています」と答えました。そのプロジェクトは東大薬学部でも本格的な創薬を始めようと、医学部出身の岩坪威先生、元武田薬品の夏苺英昭先生と私の所属する福山研究室で開始した共同研究でした。創薬は難しかったのですが、アルツハイマー病発症に重要なγセクレターゼの阻害剤の探索と機能解析を多くの方と研究することができ、共同研究の楽しさを生まれて初めて満喫できました。

その後、平成十七年度四月一日より急逝された田中圭先生（平成十六年十二月八日永眠）の後任教授として、静岡県立大学に緊急赴任ができました。私のミッションは、悲しみに途方にくれる多くの学生たちを元気づけることでした。学生たちとスポーツや酒を楽しみながら、数多くの夢あふれる化学の面白さを説き続けました。やっと、素直な学生たちに明るさが戻ったころ、研究費も必要なことに気づきました。まあ、前職にて共同研究の美味しさを知っていたので、「紙に構造式が書ける化合物で、おれにつくれないものはない！なんでも合成しますよ！」と豪語して共同研究を探し始めました。（元ボスには内緒）静岡では、特産の緑茶の「カテキン」や温州みかんの「フラボン」に多くの合成依頼があり、ポリフェノールに触ったことも無かったのですが新分野参入の好機ともなりました。その後、幸運にも恵まれていくつかの化合物の合成に成功し、合成した化合物を基にした食品有効成分のケミカルバイオロジーに発展できました。また、静岡の大きなプロジェクトにも開花でき、多くの同僚のお役にも立つことができました。驚いたことに、「光るカテキン」が静岡新聞の一面に取り上げられ近所にも薬学の先生として認知されました。

静岡にて、テーマを選ぶ自由を得たので、学生時代からの夢であるキノコ由来の天然物合成を開始しました。松本先生と白濱先生のライフワークであったキノコはずっと憧れていました。1980年代にドクササコ 17Kg から 170 μ 単離されたアクロメリン酸を、30年後の静岡にてではグラムスケールで合成できました。また、全合成をネットで知ったいくつかの衛生研究所からのサ

ンプル請求にも答えることもできました。いまでもドクササコの被害があると聞いてびっくりしました。さて、きのこ研究の大御所の静岡大学の河岸教授は、北海道大学の先輩で出身地も同じ釧路です。当然、きのこ由来の無理難題の化合物の合成を依頼（強制）されております。スギヒラダケでは、単離できない天然物(?)の不安定なアジリジンカルボン酸を「あるはずだから合成してよ」の無理難題に答えることができました。次のフェアリー化合物では、世界の食料危機を救うため圃場に散布可能な量(100g)の合成や、新規ホルモンとして証明のためイミダゾール環に2つの¹³Cの入った化合物の合成でした。まあ、先輩の命令にはノーと言うことは許されませんでした。静岡大学農学部や名古屋大学ITbMの多くの研究者たちと楽しい時間を過ごす幸運にもなりました。

私の座右の銘は「花となるより根となろう」です。先日、慶応大学蹴球部(ラグビー部)元部長の只野金一先生から「うちの部員もよく使う言葉だね」と言われ、「フォワードの選手は好きですね」と答えました。私のポジションはスクラムで相手と激突をする一番前のプロップです。当然、ボールを持ってタッチライン沿いを快走することも、トライのゲットも滅多にありませんでした。しかし、展開してくれる仲間たちを信じて、低く鋭いスクラムを組みモールラックを押し続けました。ただ、だれも気がつかない(土の中?)で踏ん張るフォワードプレーには誇りあり、自分の研究(全合成)にも似ています。だから、私は全合成という「根」を張り、化合物という栄養を供与し、方々に「花」が咲く研究スタイルが合っていると思います。また、研究の楽しみは「なにか新しいこと(エトバス ノイエス)の出会い」ですが、「人との出会い」も大きな楽しみでもあります。多くの後輩たちに、仲間がいるからサイエンスは楽しいということを教えていきたいと考えています。

本原稿の執筆中にうれしいニュースが飛び込んできました。我らの上村大輔先生が平成30年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。長年に渡る研究と教育に対する多大な功績によるものです。おめでとうございます。これからも健康に留意されて益々のご発展をお祈りいたします。

平成30年12月吉日

平成30年度会長 菅 敏幸(静岡県立大学薬学部)